

「うえに」の内部構造

— 「うえ」の名詞性と「に」の位置付けを中心に —

安 祥希

要 旨

本稿では、従来の研究が指摘している「うえに」の2用法について検討することを目的とし、「うえ」の名詞性の多寡、「うえ」と「に」の結合度、および、「に」の位置付けという観点から分析を行った。

その結果、添加を表すとされる「うえに」が複合辞であるのに対し、従来、複合辞とされていた方面、領域を表すとされる「うえに」は、「うえ(名詞)+に」という内部構造を持つものであることが明らかとなった。加えて、両者を場所の「に」と関連付けることで、複合辞「うえに」が空間概念から時間概念へという言語の拡張の流れのなかで無理なく捉えられることを主張した。

キーワード

「うえに」 複合辞 格助詞 場所の「に」

1 はじめに

「うえ」は、空間を表す実質名詞としての機能を担うほか、本稿で扱うような複合辞として機能する場合がある。その現れ方には、「うえに」「うえで」「うえは」があり、従来の研究は、各々の形式の意味用法の分類に重点を置くものが多い。

そのなかで、「うえに」は複合接続助詞とされる形式であるが、同じく複合接続助詞とされる「うえで」に比べ、扱っている研究は多くない(田中 1999、田中 2001、馬場 2005、長谷部 2013 など)。「うえに」を扱っている先行研究のうち、田中(1999、2001)は、「うえに」に「累加」と「用途」の2つの用法があるとしている。以下、順に「累加」と「用途」の例である。

- (1) 彼はフランス語ができるうえに、ドイツ語も堪能だ。 (田中 2001:259)
- (2) 放射性元素の発見は自然科学のうえに大きな変革を与えた。 (田中 2001:261)

しかし、田中(1999、2001)が「用途」としている(2)のような用法について、馬場(2005)は「格成分的な用法」、長谷部(2013)は形式名詞の用法として取り上げており、その位置付けについては意見の一致を見ない。

そこで、本稿では、先行研究が複合接続助詞としている「うえに」について、「うえ」の名詞性の多寡、「うえ」と「に」の結合度、および、「に」の位置付けという観点から検討し、「うえに」の文法体系における位置付けについて論じていく。

2 先行研究

2.1 田中(1999、2001)

田中(1999、2001)は、接続助詞化した「うえに」「うえで」「うえは」を取り上げている。そのなかで、本稿と関連する「うえに」については、<ウエニ>①と<ウエニ>②に分け、<ウエニ>①を基本用法、<ウエニ>②を派生用法とする。

<ウエニ>①は、「累加」「添加」を表すものであるが、<ウエニ>①の「に」は任意成分であり、累加の意味を明示する際に使用される傾向があるとしている。以下、例の一部を示す¹。

- (3) 彼はフランス語ができるうえに、ドイツ語も堪能だ。 (= (1))
(4) あの店は値段が高いうえに、サービスも悪い。 (田中 2001 : 260)
(5) ごちそうになったうえに、お土産までいただきました。 (田中 2001 : 260)

また、田中(2001)は、「この用法 [筆者注: 田中(1999、2001)の<ウエニ>①] で注意すべき点は一般の名詞句接続である。(中略)前件、後件ともに述語成分は同一形容詞、同一動詞を繰り返す表現になおす必要がある(p.260)」とし、名詞接続について触れている²。

- (6) *気温のうえに、湿度も高い。
→気温が高いうえに、湿度も高い。
(7) *寿司のうえに、てんぷらまで食べた。
→寿司を食べたうえに、てんぷらまで食べた。 (田中 2001 : 260)

<ウエニ>②は、「用途」を表すものであり、前件は影響をもたらされる局面、分野、領域が来ると言う。

- (8) 放射性元素の発見は自然科学のうえに大きな変革を与えた。 (= (2))
(9) 季節風は日本人が生活を送るうえに大きな影響をもたらしてきた。
(10) 病がなおっていくうえにも各種ビタミンの補給は必要である。 (田中 2001 : 261)

¹ 田中(1999、2001)が挙げている<ウエニ>①の用例のなかには、「うえに」と「うえ」が混在している。しかし、「うえに」と「うえ」が同じ意味で置き換えられているのかに関する検討が必要であると考えられるため、本稿では、「うえに」で現れているもののみを引用する。

² 何を「一般の名詞句」とするのか説明されていないが、取り上げている例文から推測すると、動作性名詞でないものを指していると考えられる。本稿では、非動作性名詞とする。

田中(1999、2001)は、<ウエニ>①には名詞接続が見られないが、<ウエニ>②には名詞接続が見られるという。しかし、(8)の「うえに」が名詞に接続しているならば、そもそも、<ウエニ>②を接続助詞と見て良いのかという疑問が生じる。

また、<ウエニ>①と<ウエニ>②は、両方とりたて詞の接続を許すと言う。

(11) 努力のうえにも努力を重ねて、今日の地位を築いたのだった。 (田中 2001:261)

(12) 病がなおっていくうえにも各種ビタミンの補給は必要である。 (= (10))

<ウエニ>①の用例として挙げている(11)は、<～ノウエニ(モ)>の形で現れる繰り返し表現であるとし、「努力に努力を重ねる」の派生的用法とする。しかし、上述した(8)同様、(11)が接続助詞として働いているのかは検証を要する。

加えて、田中(1999、2001)は、「うえに」の「に」を格助詞と見ている。しかし、何をもって格助詞と判断するのか、その根拠が示されていない。

2.2 馬場(2005)

馬場(2005)は、「うえで」「うえに」「うえは」、および、「うえ」を取り上げている。そのうち、「うえで」を「継起用法」、「うえに」を「添加用法」、「うえは」を「因果用法」とする³。この「うえに」の捉え方は、田中(1999、2001)の「うえに」の基本用法と同様である。しかし、田中(1999、2001)の「用途」を表す用法の扱いでは両者の意見が対立する。

馬場(2005)は、「うえに」が「名詞+に」に置き換えられることを根拠に、対象・基準を表すニ格成分相当の用法と位置付け、田中(1999、2001)の<ウエニ>②の用法は、接続助詞的用法としては扱わないとする⁴。

(13)a. 季節風は日本人が生活を送るうえに大きな影響をもたらしてきた。 (= (9))

b. 季節風は日本人の生活に影響を及ぼした。 (馬場 2005:29)

(14)a. 病がなおっていくうえにも各種ビタミンの補給は必要である。 (= (12))

b. 治療にも各種ビタミンの補給は必要だ。 (馬場 2005:29)

証拠を挙げている分、馬場(2005)の方がより説得性が高い。しかし、「格成分的な用法」

³ 「うえ」は、「うえで」「うえに」との置き換えが可能なものとして挙げている。「うえに」に関しては、「添加用法の「うえに」と「うえ」は、相互に置き換えることができ、使い分けは特に見出せない(p.38)」とする。

⁴ 馬場(2005)は、「格成分的な用法」を複合辞の用法の一部として見ているのか、(対象・基準を表す)ニ格と捉えているのかは確かではない。しかし、「ニ格成分相当の用法」としている点から推測すると、単一の格と見ているとは考えにくい。本稿は「格成分的な用法」を、接続助詞的用法と対立する複合辞の用法として解する。

としている点で、複合辞の一部の用法として扱っていることには変わらない。また、二格と置き換えが可能であるため接続助詞とは扱わないとする馬場(2005)の議論には疑問が残る。置き換えテストは品詞性を計るのに十分な根拠にはならない(杉本 2013)。もし、上記の「うえに」が馬場(2005)の主張する「名詞+に」であるとするならば、よりの確な証拠を示す必要があるだろう。

2.3 長谷部(2013)

「うえ」を扱っている従来の研究の問題点として、統語的分析か認知的観点かのどちらかに偏っていることを指摘し、包括的に整理することを目的とし、「うえ」を統語的な制約の度合い(後接の助詞の固定度)によって、空間名詞(実質名詞)、形式名詞、複合辞に分け、意味の分類を行っている⁵。

まず、複合辞として働く「うえに」「うえで」「うえは」は、馬場(2005)の表現を踏襲し、それぞれ<添加用法><継起用法><因果用法>を担うものとしている。

(15) (遊亀さんは)ご高齢のうえに体調を崩されておられるそうなので、絵はもう描かれないのだろうか。(K)⁶

(16) 兼業農家というのは農業所得があるうえに実物がある、住宅がある。(K)

(長谷部 2013 : 71)

<添加用法>の場合、「うえ」の後接助詞は二格に限定されるが、省略(無助詞化)することができる。また、とりたてて詞を伴って「ウエニモ」の形式になることもあるとする。

長谷部(2013)は、田中(1999、2001)の<ウエニ>^②の用法、馬場(2005)の「格成分的な用法」を形式名詞の「うえ」として捉えており、<領域・基盤用法>を有するものとしている⁷。

(17) 英国の現在の政治は、その反省のうえに成り立っているのであった。(K)

(18) 私の研究調査は、私が新聞記者としての地位を獲得するうえにもきわめて大切なものであった。(K)

(長谷部 2013 : 70)

これらを、動作が行われる際の<領域>や<基盤>など、場を設定する役割を担う用法

⁵ 統語的な制約とは、「前接句の特徴と「うえ」に後接する助詞の現れ方、つまりある種の格助詞(場合によってはとりたてて助詞)に固定されているかどうかを指す(p.67)」ものとしている。

⁶ 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」からの引用は、文末に「(K)」を付けている。

⁷ 「[1]単に形式的に用いられ、具体的かつ空間的な位置を指すわけではないこと [2]後接形式の助詞が、固定ではないものの、いくつかの形式に限定されていること(p.70)」の条件に当てはまるものを形式名詞としている。

とし、格助詞「ニ、デ、カラ」が後接する形式、もしくは、(18)のようにとりたて詞が付く形式にはほぼ限定されると述べている。

2.4 まとめ

以上の先行研究を簡略にまとめたものを表1に示す。

表1 先行研究における「うえに」と「に」の捉え方⁸

	用法①	用法②	用法②における「に」の捉え方
田中(1999、2001)	接続助詞	接続助詞	格助詞
馬場(2005)	接続助詞	格成分的な用法	助詞
長谷部(2013)	複合辞	形式名詞+ニ格	格助詞

田中(1999、2001)と馬場(2005)は「うえに」の用法の記述に主眼を置き、用法①と用法②両方を一語化したものとして見ている。一方、長谷部(2013)は固定化という制約で「うえ」を分類し、認知的観点から記述しているが、用法②の「うえに」は、「うえ+ニ」としている。

本稿は、用法①は複合接続助詞、用法②は「名詞(うえ)+ニ」であると考えている。したがって、結論としては、長谷部(2013)と同様となる。しかし、長谷部(2013)では、用法①と用法②における「に」を一貫して格助詞と捉えているが、なぜ、格助詞と見るのかに関する根拠が示されていない。本稿では、名詞(動作性名詞、非動作性名詞)との共起、「ガ/ノ」交替といった文法的なテストから、「うえに」の各用法が上述のように位置付けられることを示す。また、「うえに」を構成する「に」についても、より踏み込んだ議論を行う。

結論を先取りするならば、用法①は結合度の高い接続助詞として機能する複合辞「うえに」であり、用法②は「名詞(うえ)+ニ」の内部構造を成すものである。用法②は、領域や前提を表すものであり、「名詞(うえ)+ニ」における「ニ」は、場所の「ニ」と位置付けられる。次節以降、詳細を検討する。なお、以下の議論では、用法①に該当する「うえに」を【うえに①】、用法②に該当する「うえに」を【うえに②】と表記する。

3 「うえに」の内部構造

本節では、「うえに」の結合度と「うえ」の名詞性の多寡を確認するために、「うえに」に先行する名詞との共起関係、および、「うえに」に前節する節の性質について検討を行う。

3.1 名詞接続

3.1.1 動作性名詞との共起

⁸ 「複合辞」の捉え方、観点は一樣ではないが、先行研究での捉え方をまとめたものとして示しておく。なお、名称は先行研究に従う。

まず、動作性名詞が「うえに」に先行する用例を提示する⁹。

- (19) 脊柱の研究にもとづく、神経活動のうえにおきる多くの故障は、椎骨と椎骨との間を通過する場所においてである。 『講座集復刻版 2002』
- (20) それは過去の出来事(テキスト)を、現在の人間がどのように解釈できるのか、を問う。ディルタイは自己の体験を過去の表現(出来事)に「自己移入」して「追体験」し、現在に過去を再現しようとしたし、ガダマーは、過去の出来事の「事柄に即した真理」の要求を現在の状況が引き受け、過去の地平と現在の地平を融合させようとした。かれらは、ともに過去の意味と現在の意味の落差をどのように解消するかという問題設定のうえにあり、解釈が言語によってなされるかぎり、言語の意味を前提にしていた。 『フーコーの思想 2001』
- (21) 一見自明のようにみえる平行線の公準が、ユークリッドにはそうは思えなかった。だからこそ彼は、これを公準の中に加え、その仮定のうえに彼のユークリッド幾何学を構築したのである。 『数学の天才列伝 2002』
- (22) SIS をこのようにとらえない限り、その実相を知ることは不可能である。つまり SIS は、現在のコンピュータの使い方に対する反省の上に現われてきた考え方だということだ。 『SIS は企業を変える 1991』
- (23) こういう小説家としての自覚のうえに書かれたのが『死』(千九百十四—十五)で、弥生子二十九歳のときの作品である。 『野上弥生子短篇集 1998』
- (24) 有能な者、富める者は指導者となって、弱い者のために働くべきだとする発想のうえに、村落が動いていた。 『知っておきたい日本の神様 2005』

(19)~(24)は、いずれも「~のうえに成り立つ」のように、動作性名詞句が述語の表す動作の領域、前提といった解釈になるものであり、表1の用法②、つまり、【うえに②】に該当するものと言える。上記に現れている「うえに」は、「動作性名詞+の+うえに」が問題なく成立している。このように、「の」による連体修飾が可能であることから、「うえ」が名詞性を保っていると判断できる。したがって、(19)~(24)における【うえに②】は「名詞(うえ)+二」の可能性が高いと見られる。

一方、【うえに①】の場合、同じく動作性名詞が現れても「うえに」の形式は許されない。以下の(25b)~(27b)は、(25a)~(27a)のような「うえ」で現れている実例をもとに作成したものである。

- (25) a. 信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没収のうえ、追放した。 『下天は夢か 1989』

⁹ 本稿における用例はすべて「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」から採取したものである。

b.??信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没収のうえに、追放した。

(26) a. 一場問題にしてもナベツネが政治家なら、あんな勇退のような形でなく、政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎのうえ、喚問までするでしょうに。

『Yahoo!知恵袋 2005』

b.??～政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎのうえに、喚問までするでしょうに。

(27) a. そこで、樋口は場合によっては取り押えてやるつもりでいたところ、相手の方から飛びかかってきたので、格闘の上、最後は拳銃で撃った。

『白鳥殺人事件 1989』

b.??～相手の方から飛びかかってきたので、格闘の上に、最後は拳銃で撃った。

(19)～(24)と(25)～(27)の相違は、両用法間における「うえ」の名詞性の違いを表すものと捉えられる。すなわち、【うえに①】の「うえ」はすでに名詞性を失い、先行研究が述べるように、「うえに」の形で接続助詞として機能していると言える。実際、「動作性名詞＋の＋うえに」を許容しなかった上記(25b)～(27b)は、以下のように同じ意味を表す節の形にすると、「うえに」が許容されるようになる。

(28) a.??信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没収のうえに、追放した。 (=25b))

b. 信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没収したうえに、追放した。

(29) a.??～政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎのうえに、喚問までするでしょうに。 (=26b))

b. ～政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎするうえに、喚問までするでしょうに。

(30) a.??～相手の方から飛びかかってきたので、格闘の上に、最後は拳銃で撃った。 (=27b))

b. 相手の方から飛びかかってきたので、格闘した上に、最後は拳銃で撃った。

一方、【うえに②】は、(19)～(24)で示したように「の」による連体修飾を承けており、接続助詞であれば許容されない形式との共起を許す。したがって、【うえに②】は、上述の通り、「うえ」が名詞性を保っている「名詞(うえ)＋ニ」という内部構造を成していると考えられる。

なお、【うえに②】は、先述したように、領域といった場所解釈に近いもの((31)(32))と、ある事態が成り立つための前提となるもの((34)～(36))、そして、解釈としては前者とも後

者とも取れるもの((33))とがある。上述の例文(19)～(24)を再掲する。

- (31) 脊柱の研究にもとづくと、神経活動のうえにおきる多くの故障は、椎骨と椎骨との間を通過する場所においてである。 (= (19))
- (32) ～かれらは、ともに過去の意味と現在の意味の落差をどのように解消するかという問題設定のうえにあり、解釈が言語によってなされるかぎり、言語の意味を前提にしていた。 (= (20))
- (33) 一見自明なようにみえる平行線の公準が、ユークリッドにはそうは思えなかった。だからこそ彼は、これを公準の中に加え、その仮定のうえに彼のユークリッド幾何学を構築したのである。 (= (21))
- (34) SIS をこのようにとらえない限り、その実相を知ることは不可能である。つまり SIS は、現在のコンピュータの使い方に対する反省の上に現われてきた考え方だということだ。 (= (22))
- (35) こういう小説家としての自覚のうえに書かれたのが『死』(千九百十四—十五)で、弥生子二十九歳のときの作品である。 (= (23))
- (36) 有能な者、富める者は指導者となって、弱い者のために働くべきだとする発想のうえに、村落が動いていた。 (= (24))

(31)と(32)は、具体的に目に見える空間・場所を表していないため、実質名詞「うえ」と比べると抽象的な解釈になっている。しかし、(34)～(36)が前置きの条件を表していることと比較すると、(31)(32)と(34)～(36)で解釈の違いが出ることが分かる。しかし、(34)～(36)は、解釈のしよによって、「反省」「自覚」「発想」がある事態の領域となるものとも読み取れる。これに加え、(33)における「仮定」の解釈は、領域を表すものとも前提を表すものとも取れるため、領域と前提の両者を明確に線引きすることは難しい。場所解釈に近いもの((31)(32))、前提の解釈に近いもの((34)～(36))、また、どちらとも取れるもの((33))までを視野に入れると、場所解釈から前提解釈への用法の幅が想定できるという見方が妥当であるだろう。

以上、本項では、動作性名詞と「うえに」との接続関係について見た。そして、「うえに」には、接続助詞として機能する「うえに」と、「名詞(うえ)+二」の内部構造を成す「うえに」があり、同じ形式で現れていても内部構造を異にすることを確認した。次項では、田中(1999, 2001)で一般の名詞句とされていた、非動作性名詞との共起について検討する。

3.1.2 非動作性名詞との共起

前項では、【うえに①】が「の」による連体修飾を承けられないのに対し、【うえに②】はそれが可能であることを観察した。しかし、一見すると【うえに①】が「の」による連体修飾を許すような例文が散見される。非動作性名詞が「の」によって前接する場合であ

るが、まずは用例を見られたい。(37)~(39)が【うえに①】の用例、(40)~(42)が【うえに②】の用例である。

【うえに①】

- (37) 金メダルのうえに世界新のおまけつきという大成果だった。 (田中 2001:260)
- (38) 河野は、二十一才という東次郎が、予想したより子供っぽいのに驚いた。ラフなスタイルの上に、まん丸い顔をして、丸いメガネをかけ“坊主”といった印象だったという。 『明日への全力疾走 1988』
- (39) これでタナーは、わたしのことを甘やかされたわがまま娘のうえに、浅はかな浮気者だと思うだろう。 『花嫁は行方不明? 2001』

【うえに②】

- (40) ある段階をすぎると、自家生産の基礎のうえに堅実な拡大をとげるようになるものであり、早くこの段階に達して「運」にうちかつように、資金対策が強く求められる。 『北海道農業論・農業市場論補説 2001』
- (41) ~さらにはこれまで一人の営業担当者が行なってきた役割を分業化専門化したビジネスを展開。全社での仕組みのうえに GBD 独自での仕組みを構築し徹底することで、結果として高いお客さま満足度と生産性向上を同時に実現している。 『経営の質を高める8つの基準 2001』
- (42) ところが、階級・種族・国家・宗教というような理念の上に、まさしく資本主義権力はよりかかっているのだ。 『新村猛著作集 1993』

まず、【うえに②】の用例(40)~(42)については、動作性名詞の場合と同様に、「の」による連体修飾を許容していることが確認される。したがって、前項で指摘したように、この場合の「うえに」は「うえ(名詞)+ニ」と分析できる。しかし、用例(37)~(39)では、【うえに①】が「の」による連体修飾を承けているため、一見すると、これまでの議論の反例のように思われる。

しかし、次のような点を見ると、そうでないことが分かる。

グループジャマシイ(1998)は、「うえ(に)」について、「名詞に付く場合は「Nである／だった／であった」の形になる(p.47)」としている。上記の用例における「の」を「である／だった／であった」のいずれかの形に置き換えたものを以下に示す。

【うえに①】

- (43) a. 金メダルのうえに世界新のおまけつきという大成果だった。 (= (37))
b. 金メダルだったうえに世界新のおまけつきという大成果だった。
- (44) a. ~ラフなスタイルの上に、まん丸い顔をして、丸いメガネをかけ“坊主”とい

った印象だったという。 (=38))

b. ~ラフなスタイルである上に、まん丸い顔をして、丸いメガネをかけ“坊主”
といった印象だったという。

(45) a. これでタナーは、わたしのことを甘やかされたわがまま娘のうえに、浅はかな
浮気者だと思うだろう。 (=39))

b. これでタナーは、わたしのことを甘やかされたわがまま娘であるうえに、浅は
かな浮気者だと思うだろう。

【うえに②】

(46) a. ある段階をすぎると、自家生産の基礎のうえに堅実な拡大をとげるようになる
ものであり、早くこの段階に達して「運」にうちかつように、資金対策が強く
求められる。 (=40))

b.??ある段階をすぎると、自家生産の基礎であったうえに堅実な拡大をとげるよう
になるものであり、～

(47) a. ~さらにはこれまで一人の営業担当者が行なってきた役割を分業化専門化した
ビジネスを展開。全社での仕組みのうえにGBD 独自の仕組みを構築し徹底す
ることで、結果として高いお客さま満足度と生産性向上を同時に実現している。
 (=41))

b.??全社での仕組みであるうえにGBD 独自の仕組みを構築し徹底することで、～

(48) a. ところが、階級・種族・国家・宗教というような理念の上に、まさしく資本主
義権力はよりかかっているのだ。 (=42))

b.??ところが、階級・種族・国家・宗教というような理念である上に、まさしく資
本主義権力はよりかかっているのだ。

【うえに①】の用例における「の」を「である／だった／であった」に置き換えた(43)～(45)の各 b 文はいずれも自然である。これは、(43a)～(45a)における「の」がコピュラの連体形であることを意味している。したがって、(43a)～(45a)の各文で「うえに」に前接している「非動作性名詞+の」は、表面上は「名詞+の」であっても、叙述性を持つ節相当のものとして機能していると考えられる。よって、非動作性名詞の場合も、【うえに①】は接続助詞として捉えられる¹⁰。

一方、【うえに②】に同じ操作を加えた(46)～(48)の各 b 文はすべて不自然になる。(46a)～(48a)における「の」は、コピュラの連体形とは異なる「の」、つまり、連体助詞の「の」による修飾であり、それを「うえに」が承けられるということを表している。したがって、先に述べた通り、【うえに②】は「名詞(うえ)+二」であると分析できる。

¹⁰ 3.1.1 で検討した動作性名詞の場合は、形式上は同じく「の」であるが、述語相当にするにはコピュラではなく、「する」を使わなければならない、という点で非動作性名詞の接続とは異なる。

3.1では、「うえに」の用法間における結合度の度合いの違いを、動作性名詞と非動作性名詞との接続から観察してきた。これを踏まえ、3.2では、「ガ/ノ」交替現象について考える。

3.2 「ガ/ノ」交替

ここまでの検討を通じて、【うえに①】が、先行研究が指摘する通り、接続助詞として機能しているのに対し、【うえに②】はその構成要素「うえ」が名詞として機能していることが明らかとなった。ここでは、さらなる証拠を示すものとして「ガ/ノ」交替における両用法の振る舞いを見る。

三宅(2005)は、(49a)における「ところ」は名詞性を持っており、連体修飾節内の主格名詞句となる「飛行機」は「ガ/ノ」交替を許すが、(49b)の「ところ」は、助動詞化により名詞性を失っているため、主節内の主格名詞句となる「飛行機」は「ガ」の標示しか許さないと述べている。

- (49) a. ここは飛行機 {が/の} 飛び立つところだ。
b. 今まさに飛行機 {が/*の} 飛び立つところだ。 (三宅 2005 : 65)

上記のように、連体修飾節内の主格名詞句は「ガ/ノ」交替が許されるが、【うえに①】と【うえに②】の場合はどうだろうか。

【うえに①】

- (50) 雷 {が/*の} 落ちたうえに、木まで倒れてきた。
(51) 仕事 {が/*の} 忙しかったうえに、精神的にも不安定が続いていた。
(田中 2001:260 改)

【うえに②】

- (52) 国家 {が/?の} 発展するうえに不可欠な条件は、社会と個人の融和である。
(53) 病 {が/?の} なおっていくうえにも各種ビタミンの補給は必要である。 ((14a)改)

【うえに②】は、完全に自然と感じられるものではないにしろ、【うえに①】に比べ許容度が高いと言える¹¹。このような文法性の違いから、【うえに②】は前接要素が連体修飾節として機能しているのに対し、「ガ/ノ」交替を許容しない【うえに①】は、前接要素を連体修飾節として捉えることができず、【うえに①】は節と節を繋ぐ接続助詞として機能していると判断される。したがって、【うえに①】の前の節は従属節であると捉えられる。こ

¹¹ 【うえに②】における「うえ」は、名詞性を持つものの、実質名詞の「うえ」ほど名詞性が完全ではないことを意味する。

れは、3.1 までで述べてきた、【うえに①】は接続助詞、【うえに②】は「名詞(うえ)+ニ」として機能しているという主張を補強するものである。

4 「に」の位置付け

ここまで、【うえに①】は複合辞として、【うえに②】は「名詞(うえ)+ニ」として機能していることを見てきた。ここでは、それぞれの用法における「に」がどう位置付けられるかという問題について考える。

田中(1999、2001)では、本稿の【うえに①】は「添加」「累加」を表し((53))、【うえに②】は「用途」を表す((54))とされている。

(54) 雷が落ちたうえに、木まで倒れてきた。 (=50)

(55) 国家が発展するうえに不可欠な条件は、社会と個人の融和である。 (=52)

(54)と(55)では、「うえに」自体の意味用法は異なるが、(54)は「雷が落ちた」という場面を、(55)は「国家が発展する」という基盤などと読み取れる。田中(2001)では、用法のまとめとして(55)のような「うえに」を「用途」と命名しているが、「<ウエニ>②の前件は影響をもたらされる局面、分野、領域をあらわす(p.261)」としている。この場合の「うえ」は、高低・上下など空間的意味を表す実質名詞としての機能は薄れていると考えられるが、「何かを基盤にして」という意味が読み取れるため、(実質名詞「うえ」が持つ性質としての)場所性を保持しており、この「に」は、以下のような場所の「ニ」に近いと考えられる。

(56) ~その本を私の机の上に置きました。(K) (長谷部 2013:68)¹²

場所の「ニ」は、以下のように一文中に重複して現れることは難しい。

(57) *部屋にその本を私の机の上に置きました。

【うえに①】と【うえに②】に場所の「ニ」を挿入してみる。

【うえに①】

(58) a. 雷が落ちたうえに、木まで倒れてきた。 (=54)

b. 雷が落ちたうえに、屋根に木まで倒れてきた。

¹² 長谷部(2013)は、「空間名詞(実質名詞)」の「うえ」を、<表面><物理的高所><概念的高所><語句の先頭>の4つに分類している。(56)は<物理的高所>の一例である。いずれにしても実質名詞に付く「に」はニ格であるため、実質名詞の下位概念についてはこれ以上立ち入らない。

【うえに②】

- (59) a. 歴史とは言われてきたことを言うのではなく、みられてきたことを語るのである。歴史家の話の力は、模像と誘惑の奇妙な共生のうえに成り立っているものである。 『ディアナの森 1998』
 b.??歴史家の話の力は、模像と誘惑の奇妙な共生のうえに世間に成り立っているものである。
- (60) a. だからこそ彼は、これを公準の中に加え、その仮定のうえに彼のユークリッド幾何学を構築したのである。 (= (33))
 b.??だからこそ彼は、これを公準の中に加え、その仮定のうえにこの分野に彼のユークリッド幾何学を構築したのである。

【うえに①】は(58b)のように問題なく場所の「ニ」を取ることができる。一方、【うえに②】の(59b)(60b)は、(58b)に比べ不自然さを感じる¹³。これは、「～うえに」と、「世間に」「この分野に」が表すものが空間的であり、重複するような解釈になるためであると考えられる¹⁴。

したがって、「うえに」の2用法における「に」はその場所性の強弱から、以下のような段階性を持つものとして捉えられる。

(61) <場所性>¹⁵

場所の「ニ」 ≙ 「名詞(うえ)+ニ」 > 複合辞「うえに」

複合辞として機能する「うえに」は、一語化しており、もはや、場所という意味合いを採るのは難しいという点でも、最も右側に位置するのは妥当であると考えられる。田中(1999、2001)は【うえに②】を複合辞「うえに」の派生用法としている。何をもって基本用法、派生用法を判断しているのかは定かでないが、(61)に照らし合わせるなら、派生と捉えられるのは、むしろ複合辞「うえに」の方である。

場所性の段階性は、名詞「うえ」の概念の変化からも説明を与えることができる。

砂川(2000)は、空間概念を表す名詞が自立語から機能語的な付属語へと変化するときの

¹³ (59a)(60a)の文の内容が抽象的であり、そもそも空間を表すニ格がとりにくいが、それ以上に不自然であると判断した。

¹⁴ (59b)(60b)は、(57)ほど文法性が低いものではないと判断される。これは、3.2節で検討した「ガ/ノ」交替の許容度とも関連する。【うえに②】の「ガ/ノ」交替が【うえに①】ほど自然ではないことに対し、【うえに②】における「うえ」は、名詞性を持つものの、実質名詞の「うえ」ほど名詞性が完全ではない可能性について触れた。つまり、【うえに②】における「うえ」の場所性は、【うえに①】と実質名詞「うえ」の中間的なものと捉えられる。【うえに②】の場所性が強ければ、(57)同様、他の場所性名詞を許容しないはずである。

¹⁵ 場所の「ニ」と「名詞(うえ)+ニ」における「ニ」については、両者における「ニ」を同じものと捉えられるのか、あるいは、同じものと捉えるべきなのかなど、その異同についてはさらなる検討が必要である。

意味の転写について述べているが、その一部に「うえ」を挙げている。「うえ」という表現は、「同時点」「以後」といった相対的な時間概念に加え、「累加」「必然性」も表されるとするが、「うえに」という表現は、空間に関わる「累加」という意味しか感じられず、(62b)のように、2つの事態の順番を入れ替えても同じ出来事を表しており、時間概念との関わりは薄いとする。一方、「うえで」は、「以後」の意味だけでなく、「あることがらが前提となってそれに積み重なる形で次の事柄が起こる」という「累加」の意味が加わっている(p.130)」と、両者の違いについて論じている。

- (62) a. その選手は日本記録も更新した上に銀メダルももらって、自分でも信じられないという顔をしていた。(累加)
 b. その選手は銀メダルももらった上に日本記録も更新して、自分でも信じられないという顔をしていた。

(63) 担当の者と相談した上で、改めてご返事させていただきます。(以後)

(砂川 2000:130)

確かに、【うえに①】の事態間の順番を変えても同じ事柄を表すと捉えられそうである。

- (64) a. 彼はフランス語ができるうえに、ドイツ語も堪能だ。(=(3))
 b. 彼はドイツ語ができるうえに、フランス語も堪能だ。
 (65) a. あの店は値段が高いうえに、サービスも悪い。(=(4))
 b. あの店はサービスが悪いうえに、値段も高い。

しかし、以下を見ると、時間的な前後関係を有する出来事を繋いでいるとも捉えられ、【うえに①】全体に「時間概念との関わりは薄い」という説明を与えることはできない。【うえに①】の例(5)(28b)(29b)を再掲する¹⁶。

- (66) a. ごちそうになったうえに、お土産までいただきました。(=(5))
 b. #お土産までいただいたうえに、ごちそうになった。
 (67) a. 信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、家財、茶器のすべてを没収したうえに、追放した。(=(28b))
 b. #信長は宗久の願いのとおり、宗瓦を罰し、追放したうえに、家財、茶器のすべてを没収した。
 (68) a. ~政界一大問題として国会・マスコミは大騒ぎするうえに、喚問までするでしように。(=(29b))

¹⁶ 「#」は、文として成立するが、各 a 文の表す事柄と異なることを意味する。

b. #~政界一大問題として国会・マスコミは喚問するうえに、大騒ぎまででするように。

(66b)~(68b)は文としては成立しているため、一見、事態の順番を入れ替えても問題がないようであるが、事態の展開として(66a)~(68a)と同じ事柄を表しているとは言えない。

砂川(2000)は、「うえに」は時間概念との係わりは薄いとしているが、上記(66b)~(68b)が時間的な前後関係までを表しているならば、空間概念から時間概念へという、言語に多く見られる拡張の流れのなかで「うえに」を無理なく捉えられると考える。「うえに」と「うえで」が時間概念を表すことができ、それは「うえ」自体が時間概念化したためと捉えれば、「うえ」が空間概念から時間概念を持つようになったという議論とも整合性の取れた説明ができる¹⁷¹⁸。

以上のように、場所の「ニ」との共起関係、名詞「うえ」の意味といった側面からも、(61)のような段階性を想定することは妥当であると思われる。

5 まとめ

本稿では、複合辞「うえに」に2つの用法があるとする従来の研究の問題点を指摘し、再検討した。以下、表2に従来の研究の立場と本稿で明らかにした結果をまとめる。

表2 先行研究のまとめおよび本稿の主張

	用法①	用法②	用法②における「に」の扱い
田中(1999、2001)	接続助詞	接続助詞	格助詞
馬場(2005)	接続助詞	格成分的な用法	助詞
長谷部(2013)	複合辞	形式名詞+ニ格	格助詞
本稿の主張	【うえに①】 複合辞	【うえに②】 名詞(うえ)+「ニ」	場所の「ニ」

I 【うえに①】; 複合辞「うえに」

全体で複合辞として機能している。

「に」は、場所の「ニ」と関係付けられる。

II 【うえに②】; 名詞(うえ)+「ニ」

名詞「うえ」に「ニ」が付いたものとして捉えられる。その振る舞いを見ても、意味

¹⁷ 「うえ」の空間から時間への転用は、靱山(1992)でも述べられている。なお、靱山(1992)は、「修飾語句を伴わない時に表れる意味」をその語の基本義と認定している。

¹⁸ 時間概念においては「うえに」と「うえで」とで、どのような異なりを有するのか、あるいは、類似しているのか、についてはさらに詳細な検討を要する。

の面においても、「名詞(うえ)+ニ」と捉えるべきであるとする。

「ニ」は、場所の「ニ」と位置付けられる。

参考文献

- グループジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』 くろしお出版.
- 杉本武 (2013) 「複合助詞の品詞性について一名詞を構成要素とする複合助詞を例に一」 藤田保幸 (編) 『形式語研究論集』 87-103, 和泉書院.
- 田中寛 (1999) 「接続助詞化した形式名詞「ウエ」の意味と機能」 『語学教育研究論叢』 16: 145-165, 大東文化大学.
- 田中寛 (2001) 「接続助詞化した形式名詞「ウエ」の意味と機能」 『日本語複文表現の態様—視点と表現意図をめぐって—』 257-272, 田中研究室(私家版).
- 長谷部亜子 (2013) 「多義語ウエの意味の分析—空間名詞・形式名詞・複合辞としてのウエ」 『日本認知言語学会論文集』 13: 63-75.
- 馬場俊臣 (2005) 「接続助詞の用法の複合辞「うえて、うえは、うえに、うえ」—統語的特徴の整理と各用法の関係を中心として—」 『北海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』 55 (2): 27-42, 北海道教育大学.
- 方允炯 (2004) 「接続助詞化した「～うえて」形式の意味・機能」 『待兼山論叢 日本学篇』 38: 1-16, 大阪大学.
- 松木正恵 (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」 『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』 2: 27-52, 早稲田大学.
- 松木正恵 (2011) 「接続関係を表示する複合辞的表現—名詞性接続成分のタイプから見た連体複文構文と連用複文構文の接点—」 『NINJAL 共同研究発表会・シンポジウム平成23年度(2011年度)「複文構文の意味の研究」ワークショップ資料』 国立国語研究所.
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化—内容語と機能語の連続性をめぐって—」 『日本語の研究』 1 (3): 61-76.
- 榎山洋介 (1992) 「多義語の分析—空間から時間へ—」 カッケンブッシュ 寛子・尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲・榎山洋介 (編) 『日本語研究と日本語教育』 185-199, 名古屋大学出版会.
- 森田良行 (1980) 『基礎日本語2』 角川書店.
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』 アルク.
- 渡辺学 (1995) 「形式名詞と格助詞の相関—単文と複文をめぐって—」 仁田義雄 (編) 『複文の研究(上)』 27-54, くろしお出版.

用例出典

「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」 国立国語研究所.
(安祥希 筑波大学大学院生)

Analyzing the internal structure of *ue-ni*: Focusing on the nominality of *ue* and positioning of *ni*

AHN Sanghee

This paper aims to reconsider the two usages of *ue-ni*, with particular emphasis on the nominality of *ue*, the degree of compounding of *ue-ni*, and the positioning of *ni*.

The main results are as follows.

Ue-ni, which expresses the additive function, is a compound particle. In contrast, *ue-ni*, which expresses direction or field, has the “*ue(noun)+ni*” structure, contradictory to previous studies that have referred to it as a compound particle. In addition, by relating both usages to the locative marker *ni*, we can appropriately treat the compound particle *ue-ni* in the language expansion process from the space to the time concept.